

令和7年産 麦類技術情報 第1号

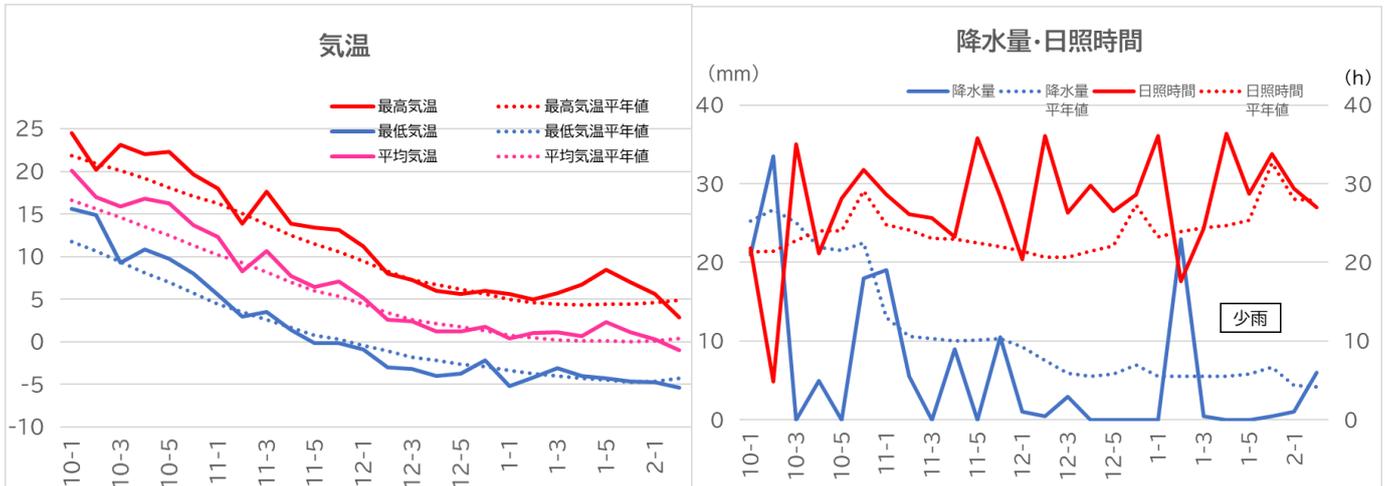
令和7年2月13日 宮城県美里農業改良普及センター

Tel 0229-32-3115 Fax 0229-32-2225

URL <https://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>



1 気象経過 (10月第1半旬～ アメダス鹿島台、下図1)



10月は高温傾向で推移しましたが、11月下旬から1月上旬にかけて、特に最低気温が平年を下回る日が多くなりました。
播種以降、少雨多照の傾向が続いています。

2 生育調査ほ生育概況

表1 生育調査結果

品種	地区	区分	播種日	条間 (cm)	12月15日		2月10日	
					草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)
シラネコムギ	大崎市鹿島台	本年値	11/30	15.0	-	-	5.4	330.0
夏黄金	涌谷町	本年値	11/5	22.2	8.4	247.7	9.1	469.0
		前年比・差	+13	99%	68%	59%	82%	74%
		平年比・差	+4	105%	91%	75%	108%	95%

※ シラネコムギの12月15日は出芽前のため欠測。ほ場変更のため前年値、平年値なし。

シラネコムギは大豆後作のため生育量が少なめです。

夏黄金は、播種以降の低温で分けつが遅れており、12月調査では越冬前目標生育量(茎数400～500本/m²、葉数4～5枚)に少し足りない状況で、2月調査でも平年に比べ少なくなっています。

管内全体では、昨年に比べ播種時期が遅く、播種後の気温も低く推移しているため、茎数は少ない傾向で、また鳥害を受けたほ場も多くあります。

茎数不足であったり、地上部が見えないほどの鳥害を受けたほ場では、越冬後の株直し追肥を行う、排水対策を万全にして湿害による生育停滞を防ぐなどの対処を行ってください。

3 今後の管理について

(1)排水の見直し

- ・麦の湿害を防ぐだけでなく、麦踏みや追肥等の作業を適期に行うために水はけを良くしましょう。
- ・明きよが施工されていても、深さが足りない、排水路がないなど十分な効果を発揮できないほ場が見られます。右図のように、明きよからほ場外への排水路を確保できているか確認しましょう。

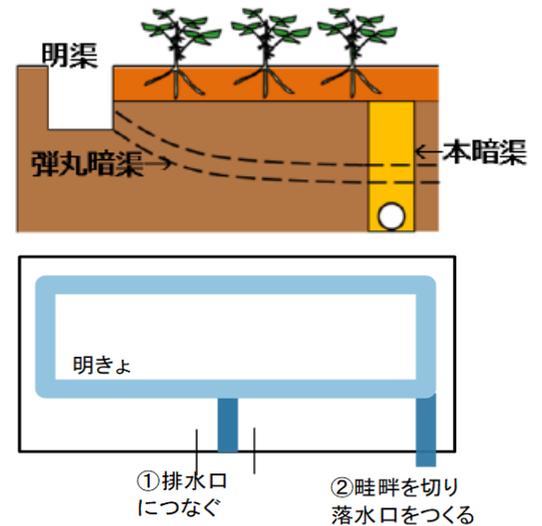


図2:明きよ施工のイメージ図
(上)深く掘り弾丸暗渠に接続
(下)排水路の確保

(2)麦踏み

- ・越冬後の麦踏みは、起生期～茎立ち(主稈長 2cm, 幼穂長 2mm 程度)前までに実施しましょう。「平均気温 4℃以上」「ほ場に靴で入って、土がつかない程度に乾いた」ときが踏み時です。
- ・越冬後に茎立ち前(主稈長 2cm、幼穂長 2mm 程度)まで、1～2 回実施を基本とします。

- 特に播種の早いほ場で生育が旺盛な場合は、冬期も乾燥したときに積極的に麦踏みを行い、播種が遅いなど、生育が遅れているほ場では、麦踏み回数を少なくして茎数の確保を優先しましょう。
- 鳥害の後は浮き根が生じ凍霜害になりやすいので、なるべくすぐに踏みましょう。

(3)追肥

- ・株直し追肥は、越冬前生育量(茎数 400～500 本/m²)が確保されているほ場では原則として必要ありません。
- ・以下のような場合、幼穂形成期前に窒素成分量で 1～2kg/10a を追肥します。
 - ①全身が黄化するなど極端な肥料切れが見られる場合
 - ②地上部が無くなるほどの鳥害を受けた場合
 - ③越冬前生育量が不足している場合

株直し追肥は、起生期(平均気温4℃に達したころ)が適当とされます。鹿島台アメダスの平年値では平均気温 4℃に達するのは 3 月 17 日ですが、ここ数年は暖冬のため 2 月中下旬には平均気温 4℃を超える日が多くなっています。

- ・大麦では、初期生育が旺盛な場合、冬季に葉色が低下することがあり、その場合は株直し追肥を行います。追肥の時期や量は小麦と同様です。

(4)堆肥早春散布について

管内の麦類は水稻、大豆後作が多く、ほ場の準備期間が短いため、作付け前に散布時間のかかる堆肥などの土づくり資材の施用が難しい現状があります。一方で、田畑輪換により地力が低下しやすいため、土づくりの必要性は高いです。そこで、麦ほ場において、比較的ほ場作業の少ない早春に麦の上から堆肥を散布する試験を行いましたので、ご紹介します。

試験地:涌谷町

堆肥 2 年連用 R5 年 800 kg/10a、R6 年 1t/10a (R6 散布日:3/18)

前作:大豆 播種日:11 月 27 日

・肥料やけなどの生育障害は見られず、散布直後には機械の踏みつぶしによる葉の傷みなどがありましたが、まもなく回復し生育への影響は見られませんでした。

・幼穂形成期以降の追肥は、無処理区・堆肥区とも通常通り行いました。

・生育調査の結果では、散布直後の4月上旬(幼穂形成期ごろ)までは堆肥区と無処理区の草丈・茎数はほぼ同数でしたが、その後の生育は堆肥区が上回りました。



図3 (左)堆肥の散布作業写真 (右)散布直後の圃場表面

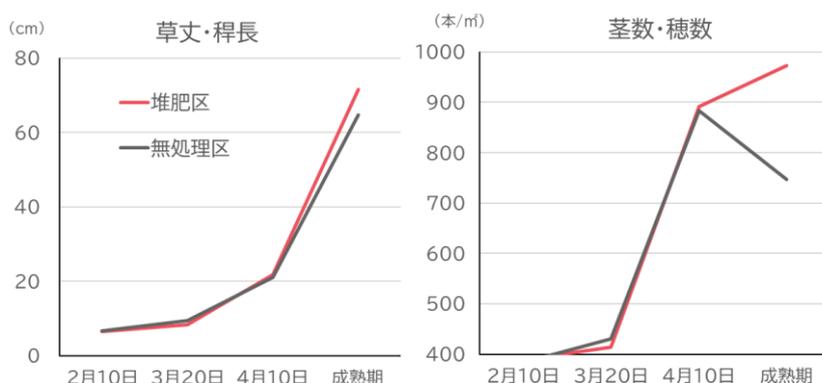


図4 生育の推移

表2 収量・品質調査

区	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	遅れ穂割合 (%)	整粒重 (kg/10a)	千粒重 (g)	容積重 (g/L)	タンパク質含有率 (%)
堆肥区	71.6	8.3	747.6	7.1	676.8	36.4	816.4	12.8
無処理区	64.7	7.9	605.8	5.5	521.9	39.6	828.3	12.4

・堆肥区の収量は無処理区対比で約30%高くなりました。麦の収量は穂数の影響が大きく、本試験でも穂数で大きく差がついています。4月以降の栄養状態が良かったため、有効茎歩合が高まり、穂数が増加したことが収量増加につながったと考えられます。

・堆肥区と無処理区の収量差から試算すると、堆肥区と無処理区の収入差は約22,000円/10aとなり、堆肥の購入価格を加味しても、十分増益につなげることができると考えられます。(※令和5年産のJA新みやぎ民間流通麦精算単価及び数量払の平均交付単価から試算)

・堆肥施用1年目の複数のほ場でも同様の調査を行いました。施用効果にはばらつきがあり、何年か連用することで効果が蓄積し、安定した効果が得られると考えられます。

○堆肥早春散布の注意点○

- ・融雪後の2～3月(起生期～幼穂形成期)に散布、3葉期前および茎立ち期以降は控える。
- ・牛ふん堆肥1～2tを目安に、成分によりN1～1.5kg/10aとなるように施用量を調整する。
- ・ほ場が乾いたときに作業する。
- ・原則として幼穂形成期以降は慣行どおりに追肥する。(慣行栽培と同様に、明らかに生育旺盛な場合は調整する。)